評議会運動を提唱

28日 全明討論会開かれる

三回目の「全明討論会」（院生・助手共闘主催）が九月二十八日午後一時から本校六号館六三番教室で開かれ、約二〇〇人が参集した。

討論は助手共闘がまとめた「明大闘争の総括と展望」を中心に展開された。

この中で、村幸宏助手共闘は明大闘争の当面期の運動＝「六項目要求」、「四大スローガン」を批判的に総括するとともに、新たな運動としての〝評議会運動〟の構築を提唱した。

また院生共闘、生田共闘、史地共闘など各組織からも総括と今後の展望が打ちだされた。一方、教員からは、篠崎武経営教授が「現在の闘争は人間性解放の闘いであり、学術の研究・教育は究極的には人類解放の目的以外に奉仕してはならず、そのために絶対的な自由が保障されねばならない。ここに教育、研究機関を含めた文化的諸機関の超政治性の理念が生みだされる」と述べ、さらに「超政治性に基づく大学の再建が大学問題の真の解決の道である」と訴えた。

和泉で文討論集会

文学部総討論集会が九月二十九日午後二時から和泉校舎五番教室で約二〇〇名の参加者を集め開かれた。この集会は本学に全共闘が二つも誕生するという学生戦線の分裂に対し、ノンセクトの多い文学部各闘争委が文学部内での連合を目指して開催されたものである。まず議長に竹川君（英文三）を選出したのち、各闘争委からの闘争経過報告、討論と移ったが、「全共闘をセクトの諸君にまかせっきりにしないで、さらに発展させよう」との発言が多数を示め、今後文学部各闘争委で集団化を進める方向で、毎日代表者連絡会議を開くことを確認した。